HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「都なしたり 旅にはあれども」 : 笠金村「神亀二年の難波宮行幸歌」についての考察
Author(s)	倉持, しのぶ
Citation	国語国文研究, 136, 14-25
Issue Date	2009-07-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93275
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_136-14-25.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「都なしたり　旅にはあれども」

――笠金村「神亀二年の難波宮行幸歌」についての考察――

倉持しのぶ

一

笠金村の行幸従駕に関わる作品には、〈旅〉ということを前面に押し出して詠んだものがいくつかある。その代表が、神亀元年の紀伊国行幸時に詠まれた「娘子に誂へられて作る歌」（4・五四三～五四五）である。行幸に従駕した夫が今頃は「旅をよろし」と思っているであろうと、都に留まった娘子の立場から詠んだこの作品は、行幸従駕に関わる歌としては特異な設定・内容となっている。これが行幸に従駕した官人たちが宴席などで自らの〈旅〉を「よろし」と満喫するための、周到に計算された作品であったことはすでに旧稿で論じた。[1] この紀伊国行幸には「遊覧」という性格があったことも、行幸従駕を〈旅〉と表現することに関わっていたものと思われる。[2]

また、この作品の直後に収められた、神亀二年の三香原離宮行幸時の作、「娘子を得て作る歌」でも「旅の宿りに」「外のみ見」た女性との恋の成就を詠んでいるが、これは天皇の「妻覓ぎ」を踏まえて、行幸を祝福された時空間とするためのものであったと思われる。[3] ここでも行幸従駕は〈旅〉として捉えられているのである。

これら二つの作品は、行幸従駕の作の中では公的・儀礼的なものというより、二次的な宴席などで披露されたものと考えられている。こうした作品が詠まれた背景に、「風流」を志向する聖武朝の政治理念があったことはすでに指摘されているとおりである。[4] 人麻呂の吉野讃歌などに見られる直接的な王権讃美とは異なる特異な表現の背後には、聖武朝の思潮も読み取るべきであろう。

これら二作品とは異なり、儀礼的な性格が強いと考えられる神亀二年の難波宮行幸時の作品でも、〈旅〉としての一面を強調した詠み方がされている。

冬十月、難波宮に幸す時に、笠朝臣金村が作る歌一首　并せて短歌

おし照る　難波の国は　葦垣の　古りにし里と　人皆の　思ひやすみて　つれもなく　ありし間に　続麻なす　長柄の宮に　真木柱　太高敷きて　食す国を　治めたまへば　沖つ鳥　味経の原に　もののふの　八十伴の緒は　廬りして　都なしたり　旅にはあれども（6・九二八）

反歌二首

荒野らに　里はあれども　大君の　敷きます時は　都となりぬ（九二九）

海人娘子　棚なし小舟　漕ぎ出らし　旅の宿りに　梶の音聞こゆ（九三〇）

従来この作品については、続く車持千年、山部赤人の作品との関連について言及されることが多く、三作品を連作と捉えるかどうかを中心に論じられてきた[5]。長歌は天皇の行幸によって「都」としての賑わいを見せる難波宮を詠むが、反歌第二首に「海人娘子」が詠まれていることから、「従駕に際しての讃歌としてはやや不似合いの感もある」[6]といった指摘も出され、そこに人麻呂の宮廷讃歌とは異なる特色を見出したり、主題そのものを「旅情」と捉えようとしたりする見方も示されている[7]。

結論から言えば、この作品は行幸を讃美した極めて儀礼的な作品と考えられるが、そこで〈旅〉という要素が強調されることにもう少し注目してみる必要があるのではないか。以下、この作品の主題を明らかにするとともに、〈旅〉として行幸従駕を詠むこと、「海人娘子」を詠み込むことの意味を考察していくこととする。

二

神亀二年の難波宮行幸は、聖武天皇の即位前後の一連の行幸の中で行われ、翌神亀三年には播磨国印南野行幸の帰途に難波宮に寄り、藤原宇合が知造難波宮事に任命されている。これにより、朱鳥元年の火災で焼失した難波宮は本格的に再建されることとなった。

難波宮行幸は宮の消失後も行われたらしく、聖武朝以前のもので年代のわかるものとしては文武三年と慶雲三年の作品が残されている。また、神亀二年以降にもしばしば行幸が行われ、歌も残されているが、神亀二年以外の作はいずれも短歌であり、この神亀二年の折にだけ長歌作品が詠まれ、しかも金村・千年・赤人という聖武朝を代表する歌人の作品が揃っているのである。このことはこの行幸の持つ意味の大きさを示すものと考えられる。

聖武天皇が即位まもない時期に難波宮に行幸した理由については八十島祭との関連を指摘する見方もあるが[8]、その実体は明らかではない。ただ、久々の天武直系の男子の即位にあたり、この難波宮行幸に極めて政治的な意味合いがあったことは確かであろう。

その点に関して、八木広美氏[9]が「食す国」という表現に着目して次のような指摘をしているのが参考となる。

続紀では、一四の宣命に三六例の「食国（天下）」がみられるが、このうち、続紀に即位の宣命のない元正天皇と重祚した称徳天皇を除いた、文武天皇から桓武天皇までの七帝の即位の宣命に

おいて、皇位継承と統治に関わる文脈中に二四例用いられている。特に神亀元年二月の聖武天皇の即位及び神亀改元の宣命（第五詔）には、元正が聖武に対して「此食国天下は、掛けまくも畏き藤原宮に、天下知らしめしし、みましの父と坐す天皇の、みましに賜ひし天下の業」と詔するのをはじめ、一つの宣命中の用例としては最多の七例がみられる。この行幸を聖武天皇の即位に関わる行事として捉える時、この「食す国」の語は、集中の先例歌の表現と共に、記憶に新しい聖武天皇の即位の宣命を意識したものではなかろうか。

当該作品は先行する金村の二つの吉野讃歌同様、聖武の即位と深く関わって詠まれた作品であることが確認できよう。

さて、長歌は長らく「古りにし里」として人々に忘れられていた難波の長柄が、天皇による宮の造営に伴い、「八十伴の緒」が「廬り」することで、「都なしたり」と、そこに都が出現したことを歌う。

当該歌の主題については「宮讃め」とするもの、「君讃め」とするもの、その他のものと説が分かれている。結論から言えば、本稿では当該作品の主題は「君讃め」と考える。

金村の行幸従駕歌においては天皇が直接に歌われないことはしばしば指摘されているが、当該歌においても「やすみしし　わご大君」のような表現は用いられず、難波宮造営を「真木柱　太高敷きて　食す国を　治めたまへば」と表現するのみである。また、反歌第一首においても、表現の類似が指摘される壬申の乱平定後の歌、

大君は　神にしませば　赤駒の　腹這ふ田居を　都と成しつ
（19・四二六〇）

大君は　神にしませば　水鳥の　すだく水沼を　都と成しつ
作者未だ詳らかならず（19・四二六一）

では、「都と成しつ」と天皇の意志が全面的に押し出されるのに対して、当該反歌では「都となりぬ」とあり、そこに違いを見ることもできる。

たしかに、こうした点からは、当該作品の中心は天皇の行幸に伴って出現した「宮」の賑わいを詠むことであって、天皇そのものを直接讃美する意識が薄いとも考えられる。しかし、金村の行幸従駕歌、特に当該歌に先立つ、養老七年と神亀二年の吉野讃歌の表現と当該作品を比べてみるとき、当該作品が「天皇」の行為により重点をおいて表現したものであることが確認できる。

養老七年の吉野讃歌では、二十数年ぶりに再開された吉野行幸において、過去から未来へと続く行幸の中に聖武の行幸を位置づけ、人麻呂歌を踏まえて吉野の山川の〈清〉なることが、「神代ゆ」ここに宮を定めてきた根拠であると確認して長歌を結ぶ[10]。そこには行幸の中心たる聖武の姿は歌われず、ただ「かくし知らさむ」と抽象的な表現でその姿が示されるのみである。言い換えれば、この作品の主題は聖武を天武皇統の中に位置づけることであり、それゆえの〈聖地〉吉野への行幸であったと考えられる。

また、その二年後の神亀二年の吉野行幸時の作においては、吉野の〈清〉なる山川の様子に加えて「大宮人」で賑わう様を描くこと

で、天皇の統治が今まさに十全であることを描く[11]。この作品では長歌・反歌ともに天皇の姿が歌われることすらない。〈聖地〉吉野に天皇が行幸をする、ということで、すでにそこには理想的な空間が出現することが保証されているのである。

こうした表現の背景としては、もちろん吉野の持つ特殊な性格も関わっていることであろう。金村の他の行幸従駕関連歌と比べても、この二作品は極めて公的・儀礼的な性格が強いと言える。しかし問題は、これらの作品と比べた時、当該歌の「難波」は全く異なる歌われ方をしているということである。

長歌冒頭は「押し照る」という枕詞に続き「難波の国」が描写される。「難波の国」という言い方は集中に当該例を含め三例あるが、他の二例は金村より後代のものである。本来律令制の「国」ではない難波を「難波の国」と呼ぶ類例には人麻呂の「吉野の国」（1・三六）があり、金村はこの表現に学んだと考えられる。しかし、人麻呂が吉野を「国はしも　さはにあれども　山川の　清き河内」であるゆえに天皇が宮を置いたと評価するのに対し、当該長歌では難波は「古りにし里と　人皆の　思ひやすみて　つれもなくありし」状態であったと否定的に表現される。行幸地としての難波は、吉野讃歌における吉野と全く異なる歌われ方をしているのである。

そんな「難波の国」が、天皇によって宮を営まれることにより、「八十伴の緒」の賑わいをもたらされ、そこに「都」が出現したと歌われるとき、それは何にもましてそこに宮を営んだ天皇の力によることを示しているのではないだろうか。ことに、「人皆」が「つれもなくありし間に」そこに宮を営むという天皇の行為は、人智を超えたものとして讃えられていると捉えるべきであろう。

即位の年を挟んでの二度の吉野讃歌においては、〈聖地〉吉野への行幸が聖武を天武皇統の後継者として位置づけ、さらにはその行幸によって十全な様を見せる吉野を歌うことに主眼があった。言い換えれば吉野が〈聖地〉であることが、聖武の正当性を保証し、その治世が完全なものであることを保証していたのである。

この二つの作品の後に詠まれた当該作品では、「難波」にはもとからそのような〈聖地〉としての性質があるとは歌われず、むしろ否定的な評価が与えられる。そんな「難波」に天皇の行幸によって「都」が出現すると歌われるのである。ここで讃美されているのは天皇その人に他ならない。聖武の王位継承者としての正当性は吉野讃歌ですでに確認され、当該作品ではより積極的に天皇の行為に焦点が当てられていると考えられる。

三

当該作品が天皇の行幸により難波に都が出現したことを歌う「君讃め」を主題としているとして、そこでこの行幸を〈旅〉であると強調して歌うことにはどのような意味があるのであろうか。

この歌の〈旅〉に注目したものとしては、清原和義氏の論[12]がある。清原氏は金村が軍王の歌（1・五、六）を「行幸従駕歌の典型として意識したであろう」とする。

讃岐国の安益郡に幸す時に、軍王、山を見て作る歌

霞立つ　長き春日の　暮れにける　わづきも知らず　むら肝の
心を痛み　ぬえこ鳥　うら嘆け居れば　玉だすき　かけの宜し
く　遠つ神　我が大君の　行幸の　山越す風の　ひとり居る
我が衣手に　朝夕に　反らひぬれば　ますらをと　思へる我も
草枕　旅にしあれば　思ひ遣る　たづきを知らに　網の浦の
海人娘子らが　焼く塩の　思ひそ燃ゆる　我が下心（1・五）

反歌

山越しの　風を時じみ　寝る夜おちず　家なる妹を　かけて偲
ひつ（六）

清原氏は

行幸地で大君を讃え、大勢の従駕の者を描き、家郷を思い、異郷の地や人を歌うことが、一つの典型として伝統的に存在していたのであろう。

とし、特に当該反歌第二首の「海人娘子」は軍王の歌を基にしたと論じている。同じ金村の「角鹿津にして船に乗る時の歌」（3・三六六、三六七）が、この軍王歌を下敷きにして類似の語句・表現を多く用いていることからも、当該作品についても同様のことが考えられ、肯われる見解である。

また、先にも触れたが、難波行幸に関わる先行歌は文武三年と慶雲三年にも残されており、これらの歌はほとんどが〈旅〉を主題として歌うものである。

〔文武三年正月〕

太上天皇、難波宮に幸す時の歌

大伴の　高師の浜の　松が根を　枕き寝れど　家し偲はゆ
（1・六六）

右の一首、置始東人

旅にして　物戀之鳴毛　聞こえざりせば　恋ひて死なまし
（1・六七）

右の一首、高安大島

大伴の　三津の浜なる　忘れ貝　家なる妹を　忘れて思へや
（1・六八）

右の一首、身人部王

草枕　旅行く君と　知らませば　岸の黄生に　にほはさましを
（1・六九）

右の一首、清江の娘子、長皇子に進りしなり。姓氏未だ詳らかならず。

長忌寸奥麻呂、詔に応ふる歌一首

大宮の　内まで聞こゆ　網引すと　網子ととのふる　海人の呼び声（3・二三八）

右の一首

〔慶雲三年九月（〜十月）〕

慶雲三年丙午、難波宮に幸す時に志貴皇子の作らす歌

葦辺行く　鴨の羽がひに　霜降りて　寒き夕は　大和し思ほゆ
（1・六四）

長皇子の御歌

あられ打つ　安良礼松原　住吉の　弟日娘子と　見れど飽かぬかも（1・六五）

大行天皇、難波宮に幸す時の歌

大和恋ひ　眠の寝らえぬに　心なく　この州崎回に　鶴鳴くべしや（1・七一）

右の一首、忍坂部乙麻呂

玉藻刈る　沖辺は漕がじ　しきたへの　枕のあたり　忘れかねつも（1・七二）

右の一首、式部卿藤原宇合

長皇子の御歌

我妹子を　早み浜風　大和なる　我松椿　吹かざるなゆめ（1・七三）

金村は神亀元年の紀伊国行幸時の作（4・五四三〜五四五）でも、先行する紀伊行幸歌（短歌）の表現を踏まえ、特に都に残った者の立場での詠という設定を取り入れている[13]。当該作品の制作においても同様の手法を用いたことが推測できる。

ただし、同じ〈旅〉を歌っていても、当該作品では家郷思慕の情などは歌われていない。「旅にはあれども」「旅の宿りに」と〈旅〉を強調しながらも、その辛さや心細さなどが具体的に示されることはなく、ただ、今現在の状態を、都における日常とは異なるものとして歌うのである。

この点を考える上で参考となるのが、神亀二年三月の三香原離宮行幸時の作（4・五四六〜五四八）である。

二年乙丑の春三月、三香原の離宮に幸す時に、娘子を得て作る歌一首　并せて短歌

笠朝臣金村

三香原　旅の宿りに　玉桙の　道の行き逢ひに　天雲の　よそのみ見つつ　言問はむ　よしのなければ　心のみ　むせつつあるに　天地の　神言寄せて　しきたへの　衣手交へて　己妻と　頼める今夜　秋の夜の　百夜の長さ　ありこせぬかも（4・五四六）

反歌

天雲の　よそに見しより　我妹子に　心も身さへ　寄りにしものを（五四七）

今夜の　早く明けなば　すべをなみ　秋の百夜を　願ひつるかも（五四八）

詳しくは旧稿[14]に譲るが、この作品では長歌で「三香の原　旅の宿りに」と歌い出し、以下の叙述――「天雲の　外のみ見」た娘子への思慕とその恋の成就――が続く。いわば「旅の宿り」という非日常の時空間にあることが、恋の成就を保証するのであり、「天地の神」の計らいによって娘子を得た「今夜」の永続を願うことは、祝福された時間の永続を願うという点でそのまま行幸の時空間を寿ぐことにつながるものであった。

今、当該作品を見ると、五四六番歌とは異なり、「旅の宿り」にあることが前提となって何らかの状況が起きているわけではない。むしろ、「旅にはあれども」と長歌末尾に倒置の形で示されるように、

〈旅〉という非日常の時空間では本来ありえないはずのこと――この場合は「都なしたり」という状況――が起きていることに中心が置かれているのである。

この点については、池田三枝子氏が、

> 金村は天皇の居所である壮麗な「都」に絶対的な価値を認めていた。ゆえに、金村にとっての「旅」とは、「都」を離れて鄙の地に宿ることの謂であった。「難波行幸歌」は、そのような「旅の宿り」が、行幸に従駕した大宮人の賑わいにより「都」と均質化されたことを歌っている。鄙である「旅の宿り」の地を、壮麗な都と均質化し得る聖武天皇の徳を讃えるという点で、従駕讃美歌として機能しているのである。(15)

と論じているのが正鵠を得ているであろう。

〈旅〉にあることを強調することで、当該作品の「君讃め」という性格はさらに強められているのである。

四

鄙の地である「難波」に、天皇が〈旅〉をすることで「都」が出現したと歌い、当該作品は聖武の行幸を讃美する。その中で、反歌第二首に「海人娘子」が詠まれることは何を意味するのであろうか。(16)

従来の研究ではここに金村の「享楽的精神」を指摘したり、(17)当該作品の主題そのものが「旅情」にあると論じたりしている。

たしかに、金村作品全体を見回すと、養老七年の吉野讃歌における「泊瀬女」（6・九一二）の語や、神亀三年の印南行幸従駕歌における「海人娘子」（6・九三五、九三六）への関心など、「娘子」を詠むことへのある種の偏りが存在する。しかし、すでに指摘されているように、「海人娘子」が詠まれることが必ずしも「享楽」へと結びつくわけではない。

その根拠となるのが次の作品である。

> 角鹿の津にして舟に乗る時に、笠朝臣金村が作る歌一首
> 　并せて短歌
> 越の海の　角鹿の浜ゆ　大舟に　ま梶貫き下ろし　いさなとり
> 海路に出でて　あへきつつ　我が漕ぎ行けば　ますらをの　手
> 結が浦に　海人娘子　塩焼く煙　草枕　旅にしあれば　ひとり
> して　見る験なみ　海神の　手に巻かしたる　玉だすき　かけ
> て偲ひつ　大和島根を（3・三六六）
> 　反歌
> 越の海の　手結が浦を　旅にして　見ればともしみ　大和偲ひ
> つ（三六七）

この作品は先に述べたように軍王歌（1・五、六）を踏まえたものと考えられるが、両作品とも「海人娘子」が塩を焼く情景を歌に詠み込んでいても、海人娘子への恋心を描くのではなく、家郷の妻への思いへとつなげていくのである。ここでの「海人娘子」は〈旅〉にあることを強調するもの、「ことさらに異郷であることを意識させ

る景物」[18]と考えられる。

当該作品の場合も、「海人娘子」を詠み込むことは、まずは〈旅〉を強調するためと捉えるべきである。

また、先にも述べたように、金村は先行する難波行幸関連歌を参考にした可能性が高いが、その中の一首、長忌寸奥麻呂の歌に、

大宮の　内まで聞こゆ　網引すと　網子ととのふる　海人の呼び声（3・二三八）

と「海人」を難波の景物として詠んでいる。海に近い難波宮の景物として、宮の内までとどろくような海人の呼び声を歌うことは、宮廷の栄えている様を寿ぐ意味があったであろう。当該作品が「海人娘子」の「梶の音」が「聞こゆ」とするのも、この奥麻呂歌を踏まえ、天皇に奉仕する海人の姿を聴覚によって思い描くものであると考えられる。

それが単なる「海人」ではなく「海人娘子」であるのは、清原氏[19]や『万葉集釈注』が指摘するように、長歌の「もののふの八十伴の緒」との対比の意識が働いているためと考えられる。

「もののふの八十伴の緒」を成句の形で用いたのは金村が最初である。「伴の緒」は『時代別国語大辞典・上代編』に、

伴は一定の職業に従事する部民、緒はそれを一つにまとめることを表すもので、つまり部族をさす。（中略）なお、「男」「雄」などの文字の使用からみて、そのヲはのちに男子の意とみられていたらしい。

とあり、この句が「大宮人」と異なり、特に男性官人を指す表現であったことは、猪股ときわ氏[20]に次のような指摘がある。

「ヲ（緒）」が「雄（男）」とされ、従駕の者が両性に使用される「大宮人」ではなく「男」と表わされることではじめて、行幸に従う男性官人の「娘子」への「恋」が可能であった。「大宮人」ならぬ「伴雄」は、武装の騎馬姿で野山を遊行する技で天皇に仕える勇壮な「ますらを」であり、「風流士」「遊士」（みやびを・ふうりゅうし）でもありえよう。

また、金村の長歌作品においては、「ますらを」や「（もののふの）八十伴の緒」が、「たわやめ」「海人娘子」などと対比されて詠まれているものがいくつか見られる。五四三番歌では「もののふの　八十伴の緒と出でていきし　愛し夫」が「旅をよろし」と満喫するのに対し、「たわやめの　わが身」は追いかけることもできないことを嘆いている。また、九三五番歌では「ますらをの心は無しに　たわやめの　思ひたわみて」と自らの心を歌う。先述した三六七番歌でも「ますらをの　手結が浦に　海人娘子　塩焼く煙」とあり、こうした例からは、金村作品には〈男―女〉を対にして歌う傾向があったことがうかがえる。

当該作品において「海人娘子」が詠み込まれたのも、長歌の「八十伴の緒」を意識してのものであろう。

なお、山崎馨氏は当該長歌の「続麻なす　長柄の宮」という表現が、

娘子らが　麻笥に垂れたる　続麻なす　長門の浦に　朝なぎに　満ち来る潮の　夕なぎに　寄せ来る波の　その潮の　いやますますに　その波の　いやしくしくに　我妹子に　恋ひつつ来れば　阿胡の海の　荒磯の上に　浜菜摘む　海人娘子らが　うながせる　領巾も照るがに　手に巻ける　玉もゆららに　白たへの　袖振る見えつ　相思ふらしも（13・三二四三）

から影響を受けたもので、この歌の「海人娘子」によって当該反歌の「海人娘子」が誘発されたと説く。金村作品と巻十三の作品との関連については従来からも指摘されており、そうした可能性は高いと思われる。さらに、「続麻」という表現に着目すると、当該長歌とこの巻十三の作品の他、

娘子らが　続麻掛くといふ　鹿脊の山　時し行ければ　都となりぬ（6・一〇五六）

娘子らが　続麻のたたり　打ち麻掛け　うむ時なしに　恋ひ渡るかも（12・二九九〇）

という二例があり、当該作品以外の三例では全て「娘子ら」の手で紡がれたり、巻き取られたりする「続麻」という形で用いられている。それだけ「続麻」と「娘子」との関係は密接なものとして意識されていたのであろう。当該長歌では「続麻なす」は「長柄の宮」の「長」にかかる枕詞として単独で用いられているが、「続麻」という言葉が用いられた時点で「娘子」という語を連想することは可能であったと思われる。あるいは、反歌に「海人娘子」を詠むことが前提としてあったために、「続麻なす」を枕詞として用いたとも考えられる。

枕詞「続麻なす」から「海人娘子」が連想されたのか、「海人娘子」を詠むために「続麻なす」という枕詞があえて選び取られたのかは判断しがたいが、いずれにせよ、当該作品の「海人娘子」は旅先にあることを強調するとともに、「八十伴の緒」と対になる形で詠まれていることは確かであろう。

ところで、そもそも当該作品において行幸に供奉する官人たちを「大宮人」ではなく「八十伴の緒」と表現したのはなぜであろうか。先に述べたように、「娘子に誂へられて作る歌」の長歌（4・五四三）においては都に残る「たわやめ」との対比で旅に出かける官人は「八十伴の緒」と表現されることにいわば必然があったと言える。

ここで参考となるのが、当該作品が参考とした作品として、人麻呂の「安騎野歌」（1・四五～四九）を挙げる坂本信幸氏の論[21]である。

軽皇子、安騎の野に宿る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　神ながら　神さびせすと　太敷かす　都を置きて　こもりくの　泊瀬の山は　真木立つ　荒き山路を　岩が根　禁樹押しなべ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さり来れば　み雪降る　安騎の大野に

はたすすき　小竹を押しなべ　草枕　旅宿りせす　古思ひて
（1・四五）

短歌

安騎の野に　宿る旅人　うちなびき　眠も寝らめやも　古思ふに（1・四六）

ま草刈る　荒野にはあれど　もみち葉の　過ぎにし君の　形見とそ来し（1・四七）

東の　野にかぎろひの　立つ見えて　かへり見すれば　月傾きぬ（1・四八）

日並の　皇子の尊の　馬並めて　み狩立たしし　時は来向かふ
（1・四九）

坂本氏は当該作品の「旅の宿り」の語や、反歌第一首の「荒野らに里はあれども」という逆接の条件句と人麻呂の四七番歌の「荒野にはあれど」の類似などをもとに、金村が「人麻呂作歌の大君の旅宿りの歌の発想を想起しながら」当該作品を制作したと推測する。

「安騎野歌」はかつて草壁皇子の訪れた地への息子軽皇子（文武）の「遊猟」を歌うことで、軽皇子を皇位継承者として印象づけることを意図した作品と考えられている。「遊猟」の実態がいかなるものであれ、男性によって行われたことは、たとえば山部赤人の吉野讃歌に、

ますらをは　み狩に立たし　娘子らは　赤裳裾引く　清き浜辺を（6・一〇〇一）

とあることからも明らかであろう。「遊猟」を詠んだ「安騎野歌」を踏まえた当該作品にも、そのことが幾許かは反映していると思われる。

また、金村の従駕作品には「娘子に誂へられて作る歌」（4・五四三〜五四五）のように、行幸に供奉する集団を〈男性〉として表現する作品があり、神亀三年の「印南野行幸歌」（6・九三五〜九三七）での「海人娘子」への関心なども、そうした男性官人集団を想定してのものと考えられる。

その一方で金村作品の中には、天平五年の「入唐使に送る歌」（8・一四五三〜一四五四）や、「神亀五年戊辰秋八月の歌」（9・一七八五〜一七八六）など、「大君の命恐み」旅に出る男性を後に残る女性の立場から詠んだ作品もある。こうしたことから、金村作品では行幸供奉を初め、天皇の命による〈旅〉に出るのは男性であり、それを見送り、その身を案じるのは女性である、というかなり明確な図式が意図されていたことがうかがわれる。

官命による〈旅〉はともかく、行幸に従駕する者の中には当然女性の皇族や女官の姿もあったことであろう。しかし、金村はあえてそうした女性の姿を歌うことはなく、あくまで男性のみを〈旅〉の集団として描こうとする。こうした傾向が何によるものであるのか、ここで全てを明らかにすることは出来ないが、少なくとも当該作品においては、「荒野」に「都」を出現させる天皇の雄々しい姿を歌うためには、華やかな「大宮人」ではなく「もののふの八十伴の緒」の姿を描くことが必要だったのではないだろうか。

五

以上、金村の神亀二年の難波宮行幸時の作について考察してきた。この作品は天皇の行幸によって、〈旅〉という非日常の時空にさえ「都」が出現する様を詠み、天皇を讃美する極めて儀礼的な性格を持つものであった。また、「都」をおいての〈旅〉は人麻呂の「安騎野歌」を踏まえたものであり、そのために従駕の官人はことさら「もののふの八十伴の緒」として描かれ、そうした男性官人の姿とは対照的な「海人娘子」が反歌に配されたことも明らかにし得たものと思う。

なお、金村作品全体に、〈旅〉に出る男性官人と都に残る女性というかなり明確な図式の存在も見えてきたが、こうした図式が何によるものなのか――女帝の時代から男帝の時代に入ったという歴史的な背景を反映しているのか、聖武朝の「風流」を志向する政治理念と関わるものなのか、それとも単に金村作品の表現上の特色なのか――は稿を改めて論じることとしたい。

注

（1）旧稿「『旅をよろしと』――笠金村『娘子に誂へられて作る歌』についての考察――」（『日本文学』五四―九　二〇〇五年九月）

（2）村山出「従駕相聞歌――成立の意義――」（『奈良前期万葉歌人の研究』一九九三年　翰林書房　初出一九八〇年七月）

（3）旧稿「天地の神言寄せて」――笠金村『娘子を得て作る歌』についての考察――」（村山出先生御退休記念『古代文学論集』二〇〇五年三月）

（4）池田三枝子「聖武朝の政治理念と『みやび』」（『古代文学』三四　一九九五年三月）

（5）連作と見る久米常民「笠金村とその歌集」（『万葉集の文学論的研究』一九七〇年　桜楓社）、清水克彦「養老の吉野讃歌」（『万葉論集』二　一九八〇年　桜楓社　初出一九七四年十一月）に対し、「住吉の浜」を詠む千年歌が難波宮讃歌であることに疑問を呈する『万葉集全注』（吉井巌担当）、慶雲三年の行幸歌（1・六六～六九）を根拠に、「住吉の浜」が詠まれることの意義を論じた廣川晶輝「千年の神亀二年難波行幸歌」（『セミナー　万葉の歌人と作品』六　二〇〇〇年　和泉書院）がある。また、金村歌と赤人歌との関連性は認めながらも三首の意図的な関連を否定する神野志隆光「赤人の難波行幸歌――天皇の世界と海人――」（『万葉の風土・文学』一九九五年　塙書房）、神野志説を受けて、呼応関係にある金村歌と赤人歌に千年歌が挟まれることで三首が連作として捉えられることを説く村山出「難波宮従駕の歌」（『宮廷歌人　車持千年』二〇〇二年　翰林書房　初出二〇〇〇年十一月）などがある。本稿では特にこうした論議には立ち入らない。

（6）山崎馨「難波宮行幸時の歌」（『万葉集を学ぶ』四　一九七八年　有斐閣）

（7）梶川信行「『荒野』の賑い――難波宮従駕歌」（『万葉史の論』笠金村』一九八七年　桜楓社　初出一九八五年三月）
（8）岡田精司「奈良時代の難波行幸と八十島祭」（『国学院雑誌』八〇―一一　一九七九年十一月）
（9）八木広美「金村の神亀二年難波行幸歌」（『セミナー　万葉の歌人と作品』第六巻　二〇〇〇年　和泉書院）
（10）旧稿「『万代にかくし知らさむ』――笠金村『養老の吉野讃歌』についての考察――」（『美夫君志』七二　二〇〇六年三月）参照
（11）旧稿「『万代にかくしもがも』――笠金村『神亀二年の吉野讃歌』についての考察――」（『美夫君志』七六　二〇〇八年三月）参照
（12）清原和義「笠金村の歌――難波宮讃歌とその周辺――」（『国文学　解釈と鑑賞』六二―八　一九九七年八月）
（13）旧稿（注1）
（14）旧稿（注3）
（15）池田三枝子「娘子を得て作る歌」（『セミナー　万葉の歌人と作品』六　二〇〇〇年　和泉書院）
（16）清水克彦「笠金村論」（『万葉論集　第二』一九八〇年　桜楓社　初出一九七二年二月）
（17）梶川氏前掲論文
（18）梶川氏前掲論文
（19）清原和義「笠金村――吉野の瀧と摂播の海」（『万葉集の風土的研究』一九九六年　塙書房　初出一九八〇年）
（20）猪股ときわ「天皇の行幸・歌の行幸――宮廷歌人論のために」（『歌の王と風流の宮』二〇〇〇年　森話社）
（21）坂本信幸「山部赤人――難波宮従駕作歌をめぐって――」（『論集　万葉集』一九八七年　和歌文学会）

（くらもち　しのぶ・旭川工業高等専門学校准教授）